
一人だけのアイドル

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一人だけのアイドル

【Zコード】

Z7668D

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

ずっと引退したアイドルのファンであり続けている孝司。その彼があるゲームショップに入るとそここの店員がそのアイドル奈月だった。さあどうなるか。ほのぼの系のお話です。

第一章

一人だけのアイドル

中根孝司にはずっと応援しているアイドルがいる。それは子供の頃からであり大学生になつた今でも変わりはしない。彼にとつては永遠のアイドルである。

しかしそのアイドルのことを言つと皆は笑う。それにははつきりとした理由があつた。

「もう引退しているじゃないか」

「なあ」

理由はそこであつた。既に彼が応援しているそのアイドルはもう引退しているのだ。しかも彼がその子供であった頃にある。

「それに子供だつたし」

「少しだけ活動しただけだろ？」

「それでもだよ」

だが彼はここで皆に対して反論するのだった。それは常だつた。

「俺は彼女が一番なんだよ」

「一番なのかよ」

「そうさ、一番さ」

それをまた言う。あまり大きくない身体を無意識のうちに背伸びさせてそのまま赤い顔をさらに赤く、大きい目をさらに大きくさせて主張するのである。

「俺にとつてはだけれどな

「一途だねえ」

「けれど彼女つてあの頃はまだ
ここでアイドルに詳しい友人が言つのであつた。

「子供だつたじゃないか。年齢的には御前と同じ位だらうへ
「ああ、同じ歳だよ」

そつその友人にも答える。

「それがどうかしたのか？」

「いや、何ていうかな」

「ここのでその友人は微妙な顔になつて腕を組んでからまた述べてきた。

「あれだろ。やっぱりアイドルにしろ女優さんにしろ年上に限るよ
「御前年上の人ばかり見るな」

孝司も彼の趣味は知つてるので少し呆れた顔を見せた。

「好きだよな、本当に」

「年上の人つてのは優しいんだよ。それにリードしてくれるし
案外甘えん坊のようである。楽しげな笑顔がそれを教えていた。

「だからいいんだよ。御前にはそれがわからないみたいだな」

「悪いけれどな。俺はあるの娘だけさ」

そう答えるのであつた。

「今でもな」

「これからもか?」

「ああ、これからもさ」

またはつきりと答えてみせた。

「だからな。他のアイドルも嫌いじゃないけれど」

「本命じゃなってか」

「本命はいつも一人さ」

続いてこう述べてみせた。

「何時だつてな」

「俺だつてそうだぜ」

その年上好みの友人も孝司に言つてきた。

「いつも見ているのは一人さ」

「あれか? 吉川先輩」

「そうさ、あの人さ」

水泳部の先輩である。彼はその先輩に入学の時から参つてているのである。

「俺はあの人と一緒にいられるから今最高に幸せさ」

「まあそれならそれでいいけれどな。じゃあ今日は御前は先輩と一起去か」

「やうのつもつさ。御前はどうするんだ?」

「俺は。やうだな」

彼に問われて孝司は少し考える顔になつた。それからまた三つの言葉があつた。

「とりあえず何もすることがないし」

「ゲーセンか本屋でも行くのか?」

「それもいいな。ただ、暇だしなあ」

その暇にかまけてふと考えることは。

「渋谷にでも行くかな」

「渋谷かよ」

「ああ。何か面白いものがあるかも知れないし首を回して考える顔をしていた。

「とりあえず行ってみるよ」

「原宿はどうだよ」

「あそこでも最近何があるか?」

「あることにはあるんじゃないのか?」

「少しあやふやな返答であつた。

「あそこはいつも何かやってるしな

「それはそうだけれどな。けれどな、何かな」

ここで孝司は微妙な顔を彼に見せるのであつた。

「今は渋谷に行ってみたいな

「そうか。まあそこんところは好きにするんだな

彼の返事は素つ氣無いものであつた。

「俺が行くわけじやないしな

「結局それかよ」

「まあ渋谷も悪くはないな」

しかし一応はこうも述べてみせてきた。

「変な奴も多いけれどな」

「まあそうした奴には関わらないようにしてるぞ」

これは心得ていた。東京にも色々な人間がいる。それはわかつているから彼も用心はしているのだ。さもないと東京は結構危ない街になってしまふのだ。彼等にとつて。

「そういうことでな。それじゃあな」

「ああ。何かあつたら教えてくれよ」

そう言葉を交えさせてから孝司は渋谷に寄るのであつた。渋谷はいつも通りで何の変わりもない。さしあたつてこれといった田立つものを見つけていまま彼は時間を潰した。その中でふと立ち寄ったゲームソフトショップに入つた時であった。

第一章

「いらっしゃいませ」

店員の声が聞こえてきた。その声は女の子の声だった。

「あれ、アルバイトの娘かな」

孝司はその声を聞いてふと視線をあげた。するとそこには。

「えっ、嘘だろ！？」

「どうもおかしいあげ有り難うございました」

明るい笑顔で客に応対している女の子を見て驚いた顔と声になっていた。何とそこにいるのは。

「まさか。いや」

しかし彼は自分の記憶を疑うことはできなかつた。それに考えも。そう、目の前にいる彼女は間違いない。それを悟つて彼はカウンターに立つていてる女の子のところに向かつた。周りの棚にはゲームソフトが並べられカウンターの後ろには広告やポスター、ゲーム機等が置かれている。渋谷にあるのが相応しい店の雰囲気であった。

「あの」

「はい」

女の子は彼に顔を向けてきた。その顔はやはり彼の知つてゐる顔であつた。丸くて大きな目に白い明るい笑顔。赤くて薄い唇に黒くお団子にした髪。髪型だけは記憶とは違つがそこにある顔は間違いなく彼がいつも知つてゐる顔であつた。

「霧生奈月さんですか？」

「えつ！？」

彼女もその名前を聞いて驚いた顔を見せてきた。

「どうしてその名前を知つているんですか？」

「やつぱり」

彼は彼女のその驚いた顔を見て確信した。やはり彼女だったのだ。

「まさかとは思つたけれど」

「あの」

彼女は驚きを隠せないまま彼に言葉を返した。

「今バイト中ですの」

「あっ、そうですね」

言われてそのことを思い出した孝司であった。

「すいません。それじゃあ

「お話は後で」

そう言つて話を中断するのであった。

「一時間したら終わりますから。その時に」

「その時に」

「お話あるんですね」

その彼女の方から言つてきたのであった。

「それじゃあその時に。それでいいですよね」

「はい。それじゃあ

何が何だかわからないまま話は動き孝司は彼女と話をすることが
なった。一時間後に彼が店に行くと制服姿の彼女がそこにいるので
あつた。

その制服はグレーを貴重として赤いリボンと白、黒が目立つ可愛
らしいデザインの制服であった。特にスカートのふわふわした感じ
が彼女に似合っていた。少なくとも彼から見ればそうであった。

「お待たせしました」

「はい。それでですね」

「あの」

また彼女の方から言つてきた。

「お店じや何ですか。歩きながらよかつたら」

「ええ、こちらこそ」

また彼女の言葉に応える。話は完全に彼女のペースで進んでいた。
お店を出て渋谷を歩きながら話をする。二人共制服姿ですので渋
谷にいても全然おかしくはない格好だった。しかし彼にとつては今
は説得別だった。何故なら彼女は。

「あのですね」

「何でしょうか」

また彼女の言葉に応える。

「私は。霧生奈月じゃなくて」

「そうでしたよね。山田奈月でしたよね」

「彼はそれもわかつっていたのだ。

「そちらが本名でしたよね」

「はい、そうです」

彼女、奈月も孝司のその言葉に頷くのであった。

「それも御存知なんですか」

「だからファンなんですよ」

孝司はまた笑つて彼女に言つのだつた。

「霧生奈月さん、いえ山田奈月さんの」

「けれど私はもう芸能界にはいないんですよ」

彼女は断るよつにして彼に告げた。

「それでファンなんて」

「どうして引退されたんですか?」

彼は不意にそれを問うのだつた。それもかなりダイレクトに。

「これからどんどん人気が出た筈なのに」

「中学校に入学するんで」

孝司のその問いに対してもう答えてきたのだつた。

「それでなんです」

「中学校に入学するから?」

「入学する中学校が厳しい学校でして」

「それもまた孝司に告げた。確かにそつした学校もある。理由とし

ては充分なものであつた。

「だからだつたんですね」

「それで引退されたんですか」

「正直引退しても未練はないです」

「彼女はこうも言つた。

「芸能界には憧れていましたし今も嫌いではないですけれど」

「あれですか？もつと好きなものがあるとか」

「そうです。それが今です」

「今いる時間がそうだと。言ひのであった。

「今は充分楽しいですから。それで」

「いいんですね」

「すいません。だから」

「だつたらそれでいいです」

「ここでの孝司の言葉は奈月にひとつでは思にも寄らなこものであつた。ここで是非復帰してくれと言つてくるものだと思つていたのだ。だがそうではなかつたのだ。

「それでいいです」

「いいんですか」

奈月は意外といったその感情を隠せないまま応えた。

「それで」

「だつて、芸能界にはもう興味がないんですね」

「はい」

それをまた告げるのであつた。

「そうです。小学校の時だけでも」

「だつたらいいです。もうそれでいいじゃないですか」

孝司の顔が穏やかな笑みになつていて。その笑みで奈月に対してもう言つうのであつた。

「それはそれで」

「ですか」

「僕はそなんですけれどね」

「もう私はチャイドルじやないのに」

古い言葉だがそれでもあえてこれを使うのであつた。これは奈月が実際にこう呼ばれていたからである。それを使つたのである。

「それでも」

「僕がファンだったのはアイドルだったからじやないんですよ」

孝司の言葉はこうであった。

「アイドルだつたからじゃなくて」

「そりなんですよ。ほら」

渋谷の街には多くの制服の女の子達がいる。日本についていことばかりの割合でその制服の女の子達が可愛いといふことである。奈月もまたその一人である。

「アイドルつていつても色々いるじゃないですか

「ええ」

これは本当にその通りだ。アイドルと言つても様々で一人だけではなくそれこそアイドルの数だけいるのだ。それは奈月もわかつていた。

「だつたら」

「だつたら?」

「僕はそれでいいんですよ

「何かよくわからないんですねけれど」

奈月は歩きながら首を傾げた。首を傾げるその姿が左手にある店のショーウィンドウのガラスに映つてゐる。その首を傾げる姿が。

「それでいいって」「だから。芸能界にいなくてもいいじゃないですか」孝司はそれに応えてまた言つてきた。

「別にそれでも」「いいって。あの、やつぱり」

「別に芸能界にいてもいなくともいいんです」孝司は今度はそれをはっきりと告げてきた。

「ただ。そこにいてくれれば」「私がいるだけですか」「それじゃあ駄目ですか？」

あらためてそれを彼女に尋ねるのであつた。

「僕のアイドルで」「そうですね」

奈月はそれを言われてまた微妙な顔を彼に見せてきた。その顔もまたガラスに映つている。だが孝司はガラスに映る顔ではなく彼女の顔を直接見ていた。

「あの、お答えすることとは」「勿論ですよ」

孝司はまた言つ。

「誰にも言いませんよ。山田さんがアイドルだつたつてことは」「それは有り難うござります」

正直なところ自分が元アイドルだつたと周りに言われるのは避けたいと思っていたのだ。だからここでの孝司の言葉は有り難かつた。

「それは」「ええ。それで」

それを話したうえで彼はまた言つてきた。

「アルバイトしているお店ですけれど」

「はい」

話はそこに行移るのであった。

「またお邪魔していいですか」

「お店ですか」

「駄目だつたらいいです」

もう渋谷の駅が見えてきていた。ハチ公やモアイの像が見える。
それ等を見ていると本当に渋谷に来ていると「うき持ちになるので
あつた。

「それはそれで」

「いいですよ」

だがここでの奈月の返事は、二三つと笑つたうえでの言葉であつ
た。

「えつ！？」

今のは奈月の言葉は孝司にとつては意外なものだつた。従つて今度
は彼が驚く番であった。また店のショーウィンドウのガラスに彼
の顔が映っていた。だが彼はその顔を見てはいなかつた。彼は奈月
の顔をじつと見ていたのだ。そのうえで声をあげたのである。

「今何て」

「ですから。どうぞ」

またにこりと笑つて告げるのであつた。

「何時でもいらして下さい」

「わかりました。それじゃあ」

彼は慌てたような笑顔でその言葉に応えるのであつた。

「明日にでも」

「はい。どうぞです」

いつも一人は何時でも会えるよになつたのであつた。それから孝司は変わつた。学校からの帰りはいつもわざととしていて渋
谷に向かうのであつた。

「何か最近の御前な」

「いつもと全然違うよな」

「ちょっとな。いいことがあつたんだ」

彼は笑いながらクラスメイト達の問いに応える。その下校時間に。

「それでね」

「いいことって何だよ」

「彼女でもできたのかよ」

「そもそも言つかもな」

笑いながらそれを否定しないのであつた。

「まあ言つならあれだよな」

「あれつて？」

「何なんだよ」

「アイドルだよな」

また笑いながらの言葉であつた。

「あえて言つのなら」

「おいおい、まさかそれつて」

「浮氣つてやつかい？」

彼等はそれを聞いてからかつて言葉を返す。まさか奈月と会つのだとは夢にも思つていない。真相は孝司だけが知つてゐることであった。

「まあそつかもね。強いて言つなら」

「強いて言つなら？」

「僕だけのアイドルかな」

格好のいい言葉になつていた。

「彼女は」

「何か羨ましいな、今の言葉は」

「ああ」

「それじゃあ。そつこつ」とでね

ここまで言つと鞄を手に取つた。後は帰るだけであつた。

「今からちょっと。行って来るから」

「ああ、それじゃあな」

「嫉妬しちまうがな」

彼等のやつが半分の言葉を聞きながら渋谷に向かう。彼だけの
アイドルがいる場所に。まさか彼女が本当に元アイドルだとは誰も
思わないが彼にとつてはそれはどうでもいいことになっていた。そ
れは何故か。言うまでもなかつた。そのままの彼女が最も好きだつ
たからだ。

一人だけのアイドル 完

2008・1・14

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7668d/>

一人だけのアイドル

2010年10月8日15時22分発行